

研究・調査報告書

報告書番号	担当
8 5	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳) Is Alcohol consumption associated with calcified atherosclerotic plaque in the coronary arteries and aorta? 飲酒量は冠動脈や大動脈の石灰化を伴った動脈硬化性プラークと関係するか?	
執筆者 Ellison RC, Zhang Y, Hopkins PN, Knox S, Djousse L, Carr JJ.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) American Heart Journal.2006 Jul;152(1):177-82	
キーワード 飲酒、冠動脈石灰化プラーク、大動脈プラーク	
要 旨 背景： 飲酒量と冠動脈と大動脈の石灰化を伴った動脈硬化性プラークの関連を探ることが目的である。先行研究の結果ではプラーク発生を増加させるとするものや減少させるとするもの、また飲酒はプラーク発生には関係しないとするものまで様々である。 方法： NHLBI Family Heart Study に参加し心臓のコンピュータ断層撮影を受けた 3166 人の白人およびアフリカ系アメリカ人を対象として、飲酒量と冠動脈の石灰化を伴った動脈硬化性プラーク (CAC) と大動脈の石灰化プラークの存在との関係について検討した。 結果： 年齢、人種、検査機関、BMI、高脂血症、糖尿病、高血圧、喫煙を調整した結果、非飲酒者を 1.00 とした CAC スコア >100 を持つオッズ比 (95%信頼区間) は、男性では、飲酒量が週 1-3 単位(1 単位は日本酒約 1/2 合のアルコール量に相当)、4-7 単位、8-14 単位、>14 単位でそれぞれ、0.8 (0.4-2.3)、1.1 (0.6-1.9)、0.9 (0.5-1.5) 1.5 (0.9-2.5) であった。女性ではそれぞれ、0.9 (0.5-1.6)、1.3 (0.8-2.3)、1.3 (0.7-2.2)、2.1 (0.8-5.9) であった。石灰化 (CAC スコア) のカットオフ値を変更しても結果は同様であった。また飲酒量と大動脈の石灰化についても同様の結果を示し、有意差は認められなかった。 まとめ： 飲酒は冠動脈疾患のリスクを減少させるのに有効であると何度も証明報告されているにもかかわらず、本研究では、飲酒量と冠動脈および大動脈の石灰化をともなった動脈硬化性プラークの間に関連が認められなかった。このことから、アルコールの心血管疾患のリスクに対する影響は、石灰化プラークの進展以外の機序でおこる可能性が示唆された。	